

如月に

学芸音楽祭、当日思ったり感じたりしたことを覚えているうちに記しておこうと思う。

インフルエンザは前週の学級閉鎖を引き起こし、学級閉鎖には到らなかったものの練習に支障が生じるクラスもあった。当日休まざるを得なかった君はと言えば、とても残念だったに違いない。君も仲間と一緒に歌いたかったのだから。でもね、君と一緒に練習してきたからこそ、素晴らしい学芸音楽祭になったのだと私は思う。だから皆でつくりあげた学芸音楽祭であったと胸を張って良い。ところで今年度は1年生が上位に食い込んだことが印象的だ。勿論2年生の演奏は昨年、一昨年に劣るものではなく、難しい曲にチャレンジしたクラスも多くあった。25HRの「流浪の民」はクラスの競演を締めくくるに相応しい素晴らしい演奏であり、少し速めのテンポがとても心地よかった。

私たちのことを書いておこう。「見上げてごらん夜の星を」は震災の直後によく流れていたこともあり、皆さんも聴き知った曲ではないかと思う。「上を向いて歩こう」とともに坂本九さんの代表曲で、作詞はともに永六輔さん。この50年以上前の曲に北川悠仁さんが新たなメロディーと歌詞を書き加えつくりあげた「見上げてごらん夜の星を～ぼくらのうた～」を職員で歌った。練習量も出来映えも生徒の皆さんとは比べようもないのだけれど、それでも練習は楽しくステージはとても幸せな時間だった。ビデオを観ると中央付近の若者2人がほぼ最初からノリノリに歌い、中盤からは各所に、にこにこしながらリズムをとって歌う先生たちの姿があった。宝物である。

合唱部の「花は咲く」は皆さんの心に残ったに違いない。舞台袖の小窓から観ていて、歌声のみならず、合唱の姿、聴く皆さんの姿に心打たれた。素敵な演奏であったと思う。その後、職員の入場に少々ハプニングがあったものの、合唱部の皆さんとの合同合唱を大いに楽しむことができた。

部長の真壁ひなのさんから、学芸音楽祭において教員と一緒に歌おうという申し出をいただいたときはとても嬉しかった。でも楽譜をみると、とても難しく、私たちにできるだろうかとかなり心配もした。とは言え、日頃から高い目標を持つと言っているものだから、これは挑むしかない。幸い多くの先生方が練習に参加し合同合唱にいたった。「蝶はばたく朝」は、さなぎから羽化し、そして自らの命への喜びと慈しみを抱いて朝の光に招かれ翔たいていくという、物語を感じる合唱曲。本番、ソプラノで始まる最初のフレーズから心が震え、テンポが速まるころでは、歌っている生徒や先生方に躍動感をおぼえた。私はと言うと、最後の「はばたいていく」のディクレッシェンドで目頭が熱くなり、声が消え入ったあとの、黒澤先生の奏でるピアノの四小節に聴き惚れた。これもまた宝物である。

合唱部が終わると審査打合せに入るため、例年のことなのだが演劇、弦楽を観たり聴いたりできない。それでも出演前の舞台裏で会ったりすると、頑張れと声を掛けたりもした。舞台裏というと、出演前の附属横浜中学生の緊張感が高まっている。そんなときに光陵の部員がやさしく指示を出したりして接していた。舞台上では見ることのない舞台裏でのひとこま。素敵な光景であった。

実行委員の皆さんの、当日までの準備と当日の進行に、生徒みんなとともに感謝の気持ちと労いの言葉を伝えたい。そして、練習に励み、本番に臨んだ皆さんを讃えたいと思う。

10日夕方、茶道部（お教えいただいている粕尾先生の「ちゃどうぶ」という言葉が印象的であった。この言葉、前にも聞いたことがある。）の初釜にお招きを受けた。校長室で仕事をしていたものだから、お点前の途中から部屋に入らせていただいた。お点前を務める生徒の背筋がしっかりと伸び、客である生徒もお点前に集中し、冬ならではの、炉の切られた茶室には、静寂の中にも暖かい空気が漂っていた。生徒は皆静かに集中している。そんな生徒が素敵なものだから、無粋と承知しつつもあれこれと話しかけてしまった。きっと先生は呆れられたことと察するのだが、質問に応じていただいたり、生徒もきちんと受け答えしてくれたことがとても嬉しく、ほんの短い間ではあったのだが、穏やかな気持ちとなる素晴らしい時間を頂戴した。先生に点てていただいたお茶がとてもおいしかったことは言う迄もない。足よりも心が痺れたひとときであった。